



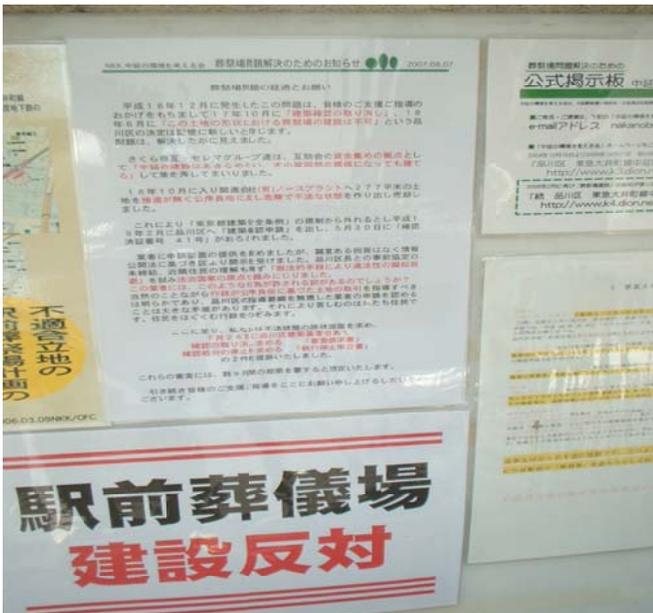
こんにちは 日本共産党品川区議会議員 鈴木ひろ子 です

事務所 中延2-11-7 TEL3783-8833
区議団控え室(品川区役所内) TEL5742-6818

中延駅葬祭場建設問題 (シリーズ22)

住民 建築審査会に 建築確認の取り消し求める

「犬小屋同然でも建てる」



「まだあきらめていないのか」「もう建たないと思っていた」
中延駅葬祭場建設問題は今年12月で丸3年。地域での動きが見えない中、さくら相互・セレマは建築確認を取り、地域住民がこれに対して区の建築審査会に取り消しを求める請求を出しています。

住民運動で2回の計画破綻

3年前(04年)の12月、中延の街に突然降ってわいた中延駅葬祭場建設問題。地域住民が「中延の環境を考える会」をつくり、区議会への請願署名運動、都庁交渉や建築審査会への審査請求、裁判など取り組んできました。

住民運動を受け、品川区は、1回目の計画を、05年10月に「建築

確認の取り消し」を行い、さらに2回目の計画を都の安全条例(敷地外周の1/6以上を道路に接していない)を理由に許可しないと決定。2回の計画は破綻しました。

44%に縮小した3回目の計画 建築確認下りる

ところが06年10月にセレマの関連会社に敷地の奥277㎡を売却。接道がなく利用できない土地を法を逃れるために売却したのです。

同月、当初計画の44%に建築床面積を縮小した3回目の計画を出してきました。

住民が納得しないまま、また、品川区の要綱で定めている「建築確認申請前に区長との協定締結を行う」こともしないまま、今年2月、品川区に「建築確認申請」を行い、5月30日に「確認」が下ろされました。

確認取り消し求めて審査請求

品川区の指導要綱も守らず、法から逃れるため死地売却の形を取り、「犬小屋同然になっても建て

る」として強行する様さくら相互・セレマ。住民は、品川区建築審査会あて「建築確認の取り消しを求める「審査請求書」と確認停止を求める「執行停止申請書」を提出し審査会で審査が行われています。12日には庁舎で「品川区建築審査会」が開かれます。いよいよ葬祭場建設問題は正念場を迎えています。

品川区が葬祭場設置要綱を改正 住宅街に建設できないように

品川区は「葬祭場設置に関する環境指導要綱」を改正。今年4月から適用しています。

- 1、標識設置期間を建築確認申請の15日前↓30日前に延長。
- 2、隣地境界線から建築物の外壁までの距離を①住宅地域は4m以上②商業・工業地域は2.5m以上空けて、中・高木等による緑化を行う。
- 3、景観を損ねる広告物設置の禁止。商店街の営業妨害禁止。

私・鈴木は昨年10月の決算委員会、「京都市は要綱で『隣地境界から葬祭場の外壁まで住居地域では4m以上離す』としている。京都市に聞いたら『住宅地であれば葬祭場との間に緩衝帯が必要ではないか。高木を

植えて根を張るスペースとして4mとした」とのこと。品川でもぜひ検討していただきたい」と提案しました。

斉藤住宅課長は「遡及して中延葬祭場に適用させることは難しいが改正について検討させていたたく」と答弁。今回の改正となりました。

課長は委員会説明で、「改正の目的は、住宅系には事実上、葬祭場を建設することが困難なように改正するもの。住居系に葬祭場ができること：狭隘な生活道路が通行に困難、商店街の方に悪影響がある」と述べています。中延に今適用できないのが残念ですが、運動の大きな成果です。3回目の計画をストップさせて適用させたいものです。

本会議の傍聴にお出でください

宮崎議員と私・鈴木ひろ子が一般質問を行います。お誘い合わせてお出で下さい。

9月20日(木) 宮崎議員 (PM) : 後期高齢者問題・地震対策・教育問題・貧困・格差問題

9月21日(金) (PM1時~) 鈴木ひろ子 : 介護問題・温暖化問題・子育て支援・消費税増税問題

無料

法律・生活相談会

9月27日(木) 午後6:30~

鈴木ひろ子事務所
中延2-11-7 Tel.3783-8833

日本共産党



北アルプス
五竜岳 (2814 m) に登りました

(五竜岳山頂にて)



昨年は鹿島槍岳、その後の1年間は選挙続きで過酷な日々でしたが、待ちに待った夏休み、今年は隣の五竜岳に登りました。八峰尾根から唐松山荘→五竜山荘に1泊・五竜岳→遠見尾根のコースで夫と2人、8月10日・11日と登ってきました。

1年ぶりの山登り、五竜岳は思った以上に岩場で、断崖絶壁をクサリを頼りに登るところも多く、ここで足を滑らせたら死ぬなどと思うところもありましたが、雲海からのぼる朝日、頂上の360度の展望、チングルマやイワカガミ、マツムシソウ、チシマギキョウなどなどいたるところにあるお花畑、そして夜は一つ一つの星が見えるほどの天の川、下界をすっかり忘れたひと時でした。今でも目を閉じると感動の光景が浮かんできます。